『密柑を持つて來い』

電信が掛かつたのか、カチ〳〵と言ふ音が聞える。

『ヱ、至極安全です、御心配ないように』

電話で僕の事を言つて、話してゐたような氣もした。

それから又長者の家へ行つた。

今度は表戸をあけてゐる。

玄關の次の間に事務室がある。

紋付を着た、血色の好い脊の低い若い男がウロ〳〵してゐる。

僕は上り込んだ。

『キサマが長者だろう、之から加周へ行つて、舟に乘つて歸るから金を呉れ。

俺は眞言秘密で何んな事でも出來るんだ。

キサマとこの財産半分呉れても、有難いとは言はんがね俺は』

此んな調子で僕はユスツた。